



寺田寅彦全集

第十一卷

寺田寅彦全集 第11巻 (全17巻)

---

1961年8月7日 第1刷発行©  
1979年2月14日 第7刷発行

¥800

著 者 寺 田 寅 彦  
発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5  
発 行 所 株式会社 岩 波 書 店  
電話 03-265-4111  
振替 東京 6-26240

印刷・精興社 製本・青木製本

---

落丁本・乱丁本はお取替いたします

短  
章



# 目次

短章	その一	五
短章	その二	一五七
注解		一三五
後記		二四五



短  
章  
その  
一







日常生活の世界と詩歌の世界の境界は、ただ一枚のガラス板で仕切られている。

このガラスは、初めから曇っていることもある。

生活の世界のちりによごれて曇っていることもある。

二つの世界の間の通路としては、通例、ただ小さな

狭い穴が一つ明いているだけである。

しかし、始終ふたつの世界に出入していると、この

穴はだんだん大きくなる。

しかしまた、この穴は、しばらく出入しないでいる

と、自然にだんだん狭くなって来る。

ある人は、初めからこの穴の存在を知らないか、また知っていても別にそれを捜そうともしない。

それは、ガラスが曇っていて、反対の側が見えないためか、あるいは……あまりに忙しいために。

穴を見つけても通れない人もある。

それは、あまりからだが肥り過ぎているために……。

しかし、そんな人でも、病が気をしたり、貧乏したりしてやせたために、通り抜けられるようになることはある。

まれに、きわめてまれに、天の炎を取って来てこの境界のガラス板をすっかり熔とかしてしまう人がある。

(大正九年五月、被柿)



と思うと、知らぬ間に自分の咽喉のどから、ひとりで大きな声が出て来た。

その声が自分の耳にはいったと思うと、すぐに、自然に次の声が出て来た。

声が声を呼び、句が句を誘うた。

そうして、行く雲は軒ばに止まり、山と水とは音をひそめた。

……そうして自分は詩人になった。

(大正九年八月、淡柿)

宇宙の秘密が知りたくなかった、と思うと、いつのまにか自分の手は一塊の土くれをつかんでいた。そうして、ふたつの目がじいっとそれを見つめていた。

すると、土くれの分子の中から星雲が生まれ、その中から星と太陽とが生まれ、アミーバと三葉虫さんようちゅうとアダムとイヴとが生まれ、それからこの自分が生まれて来るのをまざまざと見た。

……そうして自分は科学者になった。

しばらくすると、今度は、なんだか急に歌いたくなくなって来た。



根津権現の境内のある旗亭で大学生が数人会して  
いた。

夜がふけて、あたりが静かになったところに、どこか  
でふくろうの鳴くのが聞こえた。

「ふくろうが鳴くね」

と一人が言った。

するともう一人が

「なに、ありゃあふくろうじゃない、すっぼんだろ

う」

と言った。

彼の顔のどこにも戯れの影は見えなかった。

しばらく顔を見合わせていた仲間の一人が

「だって、君、すっぼんが鳴くのかい」

と聞くと

「でもなんだか鳴きそうな顔をしているじゃない  
か」

と答えた。

皆が声を放って笑ったが、その男だけは笑わなかつ  
た。

彼はそう信じているのであった。

その席に居合わせた学生の一人から、この話を聞か  
された時には、自分も大いに笑ったのではあったが、  
あとでまたよくよく考えてみると、どうもその時には  
やはりすっぼんが鳴いたのだらうと思われる。

……過去と未来を通じて、すっぽんがふくろうのよ  
うに鳴くことはないという事が科学的に立証されたと  
しても、少なくとも、その日のその晩の根津権現境内で  
は、たしかにすっぽんが鳴いたのである。

(大正九年九月、渋谷)



靈山の岩の中に閉じ込められて、無数の宝石が光り輝いていた。

試みにその中のただ一つを掘り出してこの世の空気にさらすと、たちまちに色も光も消えあせた一片の土くれに変わってしまった。

同時に、靈山の岩の中に秘められたすべての宝石も、そのことごとくが皆ただの土くれに変わってしまった。私の頭の中には、数限りもない美しい絵が秘蔵されていた。

私は試みに絵筆を取って、その中の一つを画布の上

に写してみた。

……気のついた時はもう間に合わなかった。

……同時に頭の中のすべての美しい絵もみんな無残に塗り汚されてしまった。

そうして私はただのつまらない一画工になってしまった。

(大正九年十月、渋柿)



ロンドンの動物園へインドから一匹のコブラが届いた。

蛇へびには壁蝨かべこが一面に取りついていていた。

健全な蛇にはこの虫があまりつかないものである。

こんなことが先ごろの週刊タイムスに出ていた。

「この事実にはいろいろのモラルがある」

とAが言った。

「さらに多くの詩がある」

とBが答えた。

(大正九年十月、渋柿)



夜ふけの汽車で、一人の紳士が夕刊を見ていた。

その夕刊の紙面に、犬のあくびをしている写真が、

懸賞写真の第一等として掲げてあった。

その紳士は微笑しながらその写真をながめていたが、

やがて、一つ大きなあくびをした。

ちょうど向かい合わせに乗っていた男もやはり同じ

新聞を見ていたが、犬の写真のあるページへ来ると、

口のまわりに微笑が浮かんで、そうして、……一つ大

きなあくびをした。

やがて、二人は顔を見合わせて、互いに思わぬ微笑

を交換した。

そうして、ほとんど同時に二人が大きく長くのびや

かなあくびをした。

あらゆる「同情」の中の至純なものである。

(大正九年十一月、澁柿)





脚を切断してしまった人が、時々、なくなっている。足の先のかゆみや痛みを感じることもあるそうである。総入れ歯をした人が、どうかすると、その歯がずきずきうずくように感じることもあるそうである。

こういう話を聞きながら、私はふと、出家遁世とんせいの人の心を思いみた。

生命のある限り、世を捨てるといふことは、とてもできそうに思われない。

(大正九年十一月、渋柿)